

## E. A. Poe と H. James のイマジネーションの類似性と相違について

*William Wilson* と *The Friends of the Friends* を中心に

井手美弥子

日本大学大学院総合社会情報研究科

## Similarities and Differences of Imagination between E. A. Poe and H. James

*William Wilson And The Friends of The Friend*

IDE Miyako

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

There are famous writers who struggled under the most monumental of themes, the psychic phenomena and the terror of soul; the former is Edgar A. Poe who pursued the elevating excitement of soul and the latter is Henry James who studied the dark shadow in the mind. Their imaginary activities in the books are similar but contain different colors on the application of the word in terms of the climatic effect.

Henry James analyzes the character as being a more significant impact of the text than the reality of the ghost. I say, Henry James is superior to the would - be portentous climax and the moving accident connected to the imaginative effect on the next events. But, I dare to say that Poe is the greatest author who conducts the creation of supernal Beauty and causes the sensitive soul to tear. Both writers produce a terror which demands to be taken at something more than its value ; this terror represents a profound disruption of man's mind and soul

### 序文

もし、ポウが H. ジェイムスの作品を読むことが出来たとしたならば、彼は一体どのような批評を述べたであろうか。H. ジェイムスの作品の中にポウが味付けをした作風の香りがほのかに漂っていると感じられたら、ポウの意図した「書き続ける行為」の情熱は成功したことになる。ポウが一貫して求めた“terror of soul”は「失った者への懺悔または後悔」から生じた「心の悲しみ」でもあるように、この“terror of soul”を連続させる事によって次第に

明確になってくるものは超自然的なものであり、霊的空間あるいは超絶的なものである。「魂が高揚した一瞬の状態によって「究極の美」へ到達できる」と言うのがポウの定説であるが、H. ジェイムスは“terror of soul”とは直接的に“ghost”= 心の中に存在するもの”(目に見えないものを想像する)という体験によって異次限的な要素を放出させて、主人公の内面的な葛藤、性格の複雑性、濃厚な心理を暗示し、“quantity of influence”<sup>1</sup>という避けられない運命などを物語の中に演出している。彼の作品にお

ける登場人物それぞれの“reciprocity（相互関係）”というものを探れば、そのために生じる葛藤そして苦悩している姿が見えてくる。人間社会の複雑性や個々の心理状態はまるで“ghost”であり、お互いの影響力は計り知れないものがある<sup>2</sup>。つまりその正体など所詮「見たいのに見えない」のだ。作家達は、物語の結末において、激しい「懺悔と後悔」をナレーター、又その努力に対して「失敗の報酬」としての賜物が与えられている。この副産物はかなりの消化不良を引き起こさせそうだ。

...I interposed with a few words to the effect of how well aware I was that wherever he should go, whatever he should do, he would miss our old friend terribly –miss him even more than I should, having with him so much more...<sup>3</sup>

ポウの作品は大半が第一人者で書かれ、大きな特徴をなしている。名前すら与えられていないナレーターが体験した事柄を読者に語り聞かせる物語のため、臨場感を高めている。又、時代背景や場所等の設定はされておらず、その当時の特徴的な道德、宗教的な説教は排除されている。そのため、彼の「物語」は現実的な主題からかけ離れてしまい、「詩的な耽美」を主体とし、その果てしない追求を「究極は女性の死」であるとした。又その女性に「他者の死を犠牲にして甦る行為」を要求させている彼は、「生と死」の恐怖のなかで、ほんの一瞬における恍惚とした魂の開放を、極端な快楽としての「報酬」を獲得した。その結果、彼自身が苦悩を繰り返す悪循環に陥っている。

## 1) A sarcastic imitation

「人間本来の叫び声」として心に存在する二面性への注目し、「意識と無意識」の「対立」とその「自覚」を認識し次第に目覚めて行く「自我の確立」に苦悩するポウは *William Wilson* を発表した。彼の物語としては珍しく場所が設定されている。主人公

Wilson は常に名前や生年月日、容姿や性格が一致するもう一人の Wilson 存在に悩まされる。

...Wilson and myself were the most inseparable of companions <sup>4</sup>

あらゆる場面で二人は対立しながら、それぞれ「善」「悪」を象徴的に分かち合う。そしてお互いを認めざるを得ない存在感が漂ってくるのは「最大のクライマックス」場面として Wilson がアカデミーのベッドで眠っているもう一人の Wilson を訪れた夜の驚きで描写されている。ランプの薄明かりの中で無心に眠る Wilson の「影」あるいは「ライバル」の招待を見たときの衝撃は、どのようなものであったであろうか。彼は激しい「敗北感」を味合う。そして捕らえようのない「挫折感」から逃げ出した。

..., in truth, within the bounds of human possibility, that What I now saw was result, merely of the habitual practice of this sarcastic imitation?<sup>5</sup>.

一体 Wilson は何をみたのだろうか。ここでは“doubling”を意味している。彼は恐怖に執りつかれ、ヨーロッパの町を悪名をとどろかすギャングラーとして放浪する。

一方、H. ジェイムスは *The Jolly Corner* の主人公 Spencer Brydon に Wilson と同様の体験をさせる。Spencer は“doubling”における「自己との対面」を期待していた。

彼は 23 歳の時、家族との確執を避け、単身イギリスへ渡る。やがて相続したアメリカの屋敷の賃貸による収入で、優雅な生活をイギリスで過ごしていた。56 歳の時、賃貸屋敷の建て直し件等で、不動産屋との複雑な交渉などが生じたため、摩天楼の立ち並んでいるニューヨークへ帰国する。アメリカも一時的な経済的苦境はあったが、見事に立ち直り、文化的にも著しい発展をしていた。アメリカという国は、彼にとって不愉快であり、受け入れ難い屈辱感があった。その反面、アメリカの画期的な活動は驚嘆に値するという素直な感情ももっていた。それらの対立する感情は、彼の心を動揺させる。

そんな時、家族との懐かしい思い出の詰まった屋敷の中に住み着いている「正体の知れないもの」へ興味と疑問を抱いていた。そこで「見たい」という H・ジェイムス得意の好奇心に取り付かれる<sup>6</sup>。(「物語に現実性を加える。」という H・ジェイムスの拘りがある。)

Spencer はこの冒険で、“figure” と “doubling” するのだが、ポウの意図する “doubling” とは異なっている。「人は亡霊の存在を概して恐ろしいと感じる、しかし形勢が逆転すれば、予見できない亡霊の世界で、それ自体になる」と、H・ジェイムスはこの物語で語っている。

“some variation from *that*, I say, must have produced some different effect for my life and for my “form” .(*The Jolly Corner* p.314.)” と感じた Spencer は “figure” の正体を確認し、それ自体との合体、或いは融合を試みていた。彼の恋人の言葉を借りれば、「素晴らしい屋敷なので “figure” も住み着いている。」とからかうが、実際は「僕は住んでいたかったのだ。(家族間の金銭関係の煩わしさから逃れたのだろう。 ) 23 歳の僕自身の “alter ego(second self)” かも知れない」という告白をする。

“...it's only a question of what fantastic, yet perfectly possible, development of my own nature I may't have missed. It comes over me that I had then a strange *alter ego* deep down somewhere within me, as the full-blown flower is the small tight bud, and that I just took the course, I just transferred him to the climate, that blighted him for once and for ever ” <sup>7</sup>

家の中の薄暗かった場所、すなわち “jolly corner” で “hide-and- seek” ゲームを楽しんだ日々を懐かしみながら、まさに 闇の中にぼんやりと姿を留める “figure” の声や息遣いに狂気しているのだ。“with such an abysmal conceit of my own preference” という楽天的な考えの下で最初は “figure” を「快楽」の対象としていた。そして、闇の中の冒険で “figure” とお互いの “quantity of influence” を確認しようと

しているのだろう。

“and it's only a figure, at any rate, for the way I now feel.” <sup>8</sup>

又、Spencer は 恋人 Miss Staverton との議論の果てに、彼女の『夢の中で「彼に二度もあった。」』という言葉による「嫉妬」もあり、猛然と “figure” と対面したいという厄介な意欲を持ってしたし、長期の不在からの帰国は、彼の心に深い傷を残していたのだ。「誰も知っているものはいない。」という存在感の薄さから生じる憔悴感があった。

“He isn't myself. He's the just so totally other person. But, I do want to see him, 'he added." And I can. And I shall.” <sup>9</sup>

しかし、“figure” には彼を受け入れる気持もなく、有頂天になって「暗闇の世界」に入り込んでくる Spencer を快く思っていなかった。(彼自身は亡霊との接触を楽しんでいた。) 次第に、Spencer を疎ましがり、凶暴化していく過程は「恐怖」である。やがて、その正体を現す。

It was unknown, inconceivable, awful, disconnected from any possibility ! He had been “sold”, he inwardly moaned, stalking such game as this: the presence before him was a presence, the horror within him a horror, but the waste of his nights had been only grotesque and success of his adventure an irony. Such an identity fitted his at *no point*,...the face was the face of a stranger.....<sup>10</sup>

ポウと H・ジェイムスは “terror of soul” に関し、互いに異なった観念を持っており、前者は「非現実的な恐怖」に主点をおき、後者は「人間の心理的な恐怖」に主点をおいている。

この物語自体は、結局“aspiration”の正体が“evil”であっても「見たい」という、男の「恐怖体験冒険談」という曖昧さに結論をおき、「喜劇」仕立てにしている。しかし、この喜劇はかなり厳しい物を含んでいるようだ。

*The Man of the Crowd* は、ポウの心理的な物語である。そして、ナレーターに「見たい」という積極的な行動をとらせている。ホテルの窓越しに通りを歩く60歳をすぎた「見知らぬ老人」を見かけ、彼に“quantity of influence”を感じたナレーターが、2日間にわたり、彼をひたすら追いかけるのだ。

“I observed an order of men somewhat different in habits, but still birds of kindred feather.”(下線は筆者による。*The Man of the Crowd* p.182.)

ナレーターの目を通して、ポウが通りを歩いている多種多様の群集を観察し、分析していたのは理由があったのである。「何処となく異なった雰囲気を持ちながら、同じ匂いのする人物」(注:*The Friends of The Friends*においては“Birds of a feather flock together”という表現をもちいて、特異な登場人物の出会いをさせている。)と出会う事に興味をもったのだ。

Spencer は“aspiration”の正体は“evil”である。」という予測もしている。同じ様に、*The Man of the Crowd* のナレーターも又、この「見知らぬ老人」の容姿が余りにも奇怪“incarnations of the fiend(p.183.)”であった。そして、何者も寄せ付けなかった激しい歩みの老人が“solemn walk (p.188.)”に変わった二日目、疲労困憊の状態で、ナレーターがやっと老人に追いつくことができた。

老人は結局彼には気付いてはいない。だが、彼は老人の顔をみるや“This old man... is the type and the genius of deep crime.”(*The Man of the Crowd* p.188.)と密やかな同情と余韻を残して立ち去る。ポウは「見知らぬ老人」とは、一体何者であるのか、という疑問を「序文」に、その含みを持たせている。

Men die nightly in their beds, wringing  
the hands of ghostly confessors, and  
looking the piteously in the eyes - die

with despair of heart and convulsion of  
throat, on account of the hideousness of  
mysterious which will not *suffer*  
*themselves* to be revealed.<sup>11</sup>

ポウの意図は漠然とさせているが、「見知らぬ老人」に死を目前にした人間の姿を表現しているのだろう。迫ってくる死は、悶絶するような苦しみと恐怖である。激しく歩き回る老人の形相は、その象徴であろう。

やがて老人は次第に緩やかな歩みへと変える。穏やかな「死」が待っているのだ。如何なる罪を犯した人間でも「死」は同じなのだ。ポウは「見知らぬ老人」に未来の姿“a sarcastic imitation”を透視していたのかもしれない。

では、Spencer が屋敷の中で出会った“aspiration”は一体「何者」だったのだろうか。結局、やはり単なる“a sarcastic imitation”だったのかもしれない。今でもスッキリしない疑問が残る<sup>12</sup>。やはり単純に「空家に住み着いた“aspiration”」との接触到口マンを感じた「男の物語」のほうが夢があるようだ。

## 2) quantity of influence

H・ジェームスが指摘するようなポウの「非現実的な恐怖」とは、*The Oval Portrait* 等にみられるように、一貫して「詩的な美」を存在させているようだ。

「美」を求める若き画家が妻の美しさを、その美しさを永遠に賞賛するために「保存」を試みて、その容姿をキャンバスに描くと言うストーリーを展開させた。画家は自己の満足を達成するため妻の生命を犠牲にしてしまうこと等まったく気付いていない。妻も夫への愛の深さとキャンバスの中の「分身」が次第に正体を現し、夫との“quantity of influence”が存在する事を認識する。そして「敗北」、すなわち自己の崩壊が始まる。僅か「116行」で構成されたエッセイであるが、彼の定義が凝縮され、濃厚な色彩を放っている。「実際の妻」と「肖像画の妻」の「相互関係」や「お互いに影響しあう力関係」、そして、

それらの接点にある「夫」の位置するものは何であるか？まさに“ a sarcastic imitation ”の正体を「見る」事に他ならないだろう。その代償として「永遠」の別離が与えられる。

妻は明らかに夫の「想像力」に嫉妬を感じている。夫が妻の姿を鮮明に、写實的に忠実にキャンバスに描いていく過程毎に、妻は「確実」にその生命がキャンバスに「移行」していくのを目の当たりにする。彼女はその事実を夫へ伝える事が出来ない「悲しみ」を背負っている。しかし夫は極端なまで達成度の高い「美」への陶醉のため妻へ対する配慮を失っている。妻の若さに溢れた頬の色、愛に満たされて自信に溢れ、生命のシンボルである唇の「鮮やかな赤い色」はキャンバスの中に再表現された。だが、一方では夫の卓越した「想像力」や「芸術性」は「妻の死」と言う犠牲を伴ってしまった。その恐ろしい「事実」は“ nevermore ”である。

*William Wilson* において、登場する二人の Wilson に共通する性格的なもの、興味あるもの等は、一方では、それぞれがお互いに対立するものでもあった。主人公の Wilson は「悪」であり、不道德な行為を行うが、もう一人の Wilson は「善」であり、その行為を容認する事が出来ず「暴き」たてる。主人公 Wilson はその影響から逃れるために 3 年余りを放浪するが、失敗に終る。つまり、「意志」を無意識のうちに、交流していたからである。“ same reflexion ; and each some manner was sure to hear of the other's”<sup>13</sup> これらの恐るべき一致は読者および作家の「想像力」をかき立てるであろう。お互いに応答する無意識の力は「逃れられない“ 運命 ”」で結ばれており、やがて互いに「崩壊する魂」を越えた異次元要素を兼ね備えている。そのような事柄を含めて、*William Wilson* の、後半に述べられている、ポウの得意な「科学的解析」によるもう一人の Wilson との関りである“ quantity of influence ”を見ていきたいと思う。

And again, and again, in secret communion with my own spirit, would I demand the questions “ Who is he? - whence came he? - and what are his objects?” But no answer was there

found. And then I scrutinized, with a minute scrutiny, the forms, and the methods, and the leading traits of his impertinent supervision.<sup>14</sup>

自分の姿形がそっくりなもう一人の Wilson による、同じ行動は執拗な悪戯の繰り返しであり、主人公の Wilson の苛立ち、そして募る不安を増加させていくのだ。そして自己弁明による傲慢な弁明は興味深い。

“ It was noticeable, that, in no one of the multiplied instances in which he had of late crossed my path, had he so crossed it except to frustrate those schemes, or to disturb those actions, which, if fully carried out, might result in bitter mischief...Poor indemnity for natural rights of self -agency so pertinaciously, so insultingly denied!<sup>15</sup> (彼が、最近僕の行動と cross するようなおびただし例は何一つない。それらが遂行されるならば、痛ましい禍害になっていたであろう時、彼は、僕の計画を挫折させ、この計画の実行を妨害する事を避けるために、cross してきたのだ。哀れなことではないか。当然的な自己の権利の保証がなされているにもかかわらず、無礼にも、執拗なまでに、否定されているではないか。 下線は筆者による。 筆者訳 )

Wilson の「自己弁明」で興味深いのはもう一人の Wilson との接触に関“ cross ”という言葉が用いられている事だ。

- 1 ) 交差させる。
  - 2 ) 十字をきる。
  - 3 ) 人とすれ違う。
  - 4 ) 裏切る。
  - 5 ) 妨害する。
- 等の訳が見られる<sup>16</sup>。

一般的には「妨害する」の意味であろうが<sup>17</sup>、“cross”の含んでいる「意味の二重性」により、それぞれ二人の Wilson の「善」と「悪」役割がはっきりしている。又“quantity of influence”を解明させる場合において、“doubling”が明確になるとともに、「無意識」のうちに二人が交代、交流をしていた事などがはっきりと証明さるのだ。言葉に拘ったポウの象徴的なもの、あるいは、その純粋な精神が感じられる。又、「想像力」に付いて、ポウと H.ジェイムスの捕らえ方において、それぞれにかなり興味深いものが見られる。ポウは古典的だが、H.ジェイムスは心理的、超自然的のものを加えてながら、徐々に関係のない他者を巻き込んで、“grotesque”的な風合いを加えていくようだ<sup>18</sup>。

*The Friends of The Friends* は H.ジェイムスの理念に基づいた ghost tale の代表作であるが William Wilson と平行して読んで行くと、人間の相対立する「二面性」とは「事前の打ち合わせ」があり、その一瞬に「分離」および「交代」がなされている事に気付かされる。

ポウの代表的な物語 *William Wilson* は典型的な“doubling”の効果を狙ったものだ。又、校長である DR.Bransby の性格を通して、その「二面性」について読者へ判りやすく紹介している。「仕事の時間」といわれる“sanctum”（聖域）が「休憩中」となり「主」がお休みであっても扉を開けるくらいだったら“死の苦しみ”（体罰）を喜んで受けたほうが良いほどの厳格さをもっていた。そして、しかめ面をして、嗅ぎタバコ噛み、鞭を振って厳格なアカデミの校則を主張する。同時に立派な鬘をかぶり、粉化粧を施し、物静かな顔つきをして説教をする「牧師」でもあった。この DR.Bransby をくどくどと説明した「二面性」は後に重要な「鍵」となっており“gigantic paradox”といえる。結局「人間」というのはなかなか“countenance”では判断できないのだ。より深い部分でお互いの「魂」が“quantity of influence”する瞬間に「交差」する。

ナレーターである主人公の Wilson が学んだロンドンの寄宿学校が「奇妙な建築物」であるという感想を述べ 5 年間で過ごしたにもかかわらず、寝室がいかにも「端っこ」にあったことさえ気付かなかった

その「理由」として：

- 1) 2 階建てであったが、3 段、あるいは 4 段の階段があらゆる部屋にあった。
  - 2) それぞれを上ったり、下ったりしなければならない。
  - 3) 横道もあるので、結局もといいた場所へ戻ったりする。等の複雑で奇怪な構造をしていた。
- これらは悪戯好みのポウが「偶然」を装い、言葉と雰囲気全ての「二重性」を漂わせ「曖昧さ」を盛り上げる雰囲気を醸し出す効果を上げたものである。

ポウにたいして、H.ジェイムスは *The Friends of The Friends* において、肉親の亡霊を遭遇したという似たような「体験をした」男と女の存在を描いた。「靈感」の強い男性と女性は「お互いの魂を交流する事が出来る＝お互いの魂を求め合う」と信じた「豊かな想像力」と「好奇心」をもった女主人公は余りにも“pure”で“innocent”であった、と言う同情効果があるかも知れない。しかしながら全体的に“quantity of influence”とは意外な「結末」を持っていた。

ここでは、*The Friends of The Friends* を中心にして「魂の交差」をみていきたいと思う。

この物語は女主人公である「ナレーター」、婚約者と人妻である女友達の僅か 3 名の登場人物で構成されている一種の「友情と恋愛物語」であるが、それぞれの登場人物は「名前」が付けられていない。全体的なストーリーとしては、女主人公は、彼等が、超心的なパワーを持ちお互いの心を交流させているのではないかと、という想像力と好奇心そして疑惑の狭間で苦しむことから生じる悲劇である。

物語の冒頭で、まず、女主人公は「女友達」を登場させる。女友達は、18 歳の時外国を叔母達と旅行する。その時、遙か遠く「イギリス」にいた父親の様態の急変、そしてその死を「異様な出来事で」体験する。彼女は訪れた国の美術館の一室で「帽子をかぶらず、椅子に腰をおろしている男性を父親であると思い込み、声をかけるが、別人と知り錯乱して激しく泣き叫ぶ」という異常な行為は周囲を驚かせた。後で「その死」を知らせる電報が届く事によって「伯母」達は納得したが、「気味が悪い、変な娘」

と思われる。「父親の幽霊を見た人」という印象が彼女の人生を不幸な結果へと導き、次第に孤立する。やがて結婚するものの「夫」との間がうまくいかず、数年間に渡り「別居生活」が続く。なお伏線そして「夫」が待っているという、暗示が述べられてもいる。やがて、女主人公は諺である“*Birds of a feather flock together*”を引用して、婚約者を読者に紹介する。この印象は「二重性」や「同時性」を暗示させたのである。婚約者は「母親の幽霊をみる」という体験をしていた。

They were birds of a feather because he had in his youth a strong adventure she had had about the same time just such another.<sup>19</sup>

彼女はこの時点ではまだ、“innocent”であったのだ。彼女は後に、婚約者によって彼女の「想像」した“birds of a feather”が全く別のものである事を指摘される。物語を読み終わった時、一体全体“birds of a feather”は誰と誰を「意味したのか」という疑問が生じてくる。彼女は愛情というものは“quantity of influence”、すなわち「以心伝心」がなければ「成立しない」と考えていた。「お互いに同じ癖、趣味や考えをもち、同じ迷信や、異説に偏見を持つ。同じ事を言い、時々同じ行動をする。人の好みも一緒にあり、同じ場所へ行くことを好む。同じ作者を好み、その作品を愛好する。顔つきや、雰囲気においても、類似性を持っている。」非常に「お節介な想像力」を持った彼女は、婚約者と「共鳴する魂」を持っている「人物」であり、孤独な人妻である「女友達」を「会わせてあげよう」と画策する。つまり、個々に分離して、闘争ばかりを繰り返すウィルソン達を目撃していた第三者が「お節介」にも「二人を会わせよう」とするわけである。第三者から見れば「彼らは互いを知り尽くしている。お互いの顔をドアでぶつけたり、又井戸の水が入ったバケツの水を浴びたりするような奇妙な法則には出合わない。二人は間一髪ですれ違う。彼が立てば、一方は座る。彼が出て行けば、もう一人は入って来る。一人が「家」の中に入ってきた時、もう一人が側にいて気付かない

で出て行ったりするような可能性はありえない。」一言で二人は交代をする。それは矛盾しているが、あたかも事前に打ち合わせをしているようだとすれば説明がつくように出会いそこなっている。」しかし彼女の勝つてな想像力は「仰天」するような事件が起こす。作家は「同じ様な体験を持つ二人」を「出会わせる」事を画策する事で彼女を「利用」しようとしたのだ。

「大好きな人に、親友を紹介する事は馬鹿げた事ではない。」と思うほど、純朴な女性だったのだ。

“*Am I your dearest friend?*” she asked with a smile that for a moment brought back her beauty. I replied by pressing her to my bosom; after which she said: “Well, I’ll come. I’m extraordinarily afraid, but you may count on me.”

When she had left me I began to wonder what she was afraid of, for she had spoken as if she fully meant it.<sup>20</sup>  
(下線は筆者による。)

最後のセンテンスは女主人の「お節介」が犠牲を伴っている事を意味している。H.ジェイムスの「巧みさ」は、読者への過剰サービスを同時に組み込んだ事だ。

それは、続いて起る事件、つまり女友達の「夫の死」というものを提供することだった。ここで初めて別居中「彼女の夫」について語られる。「女友達の夫」は長年絶望状態にありながら、苦悶の果てにいに妻を「愛」しながら「死んだ」のであるかを読者は始めて知るのだ。この「死」は恐るべき“interference”である。彼女は、女主人公の「婚約者」に「会う」という事すら「容認」されていなかったのではなかったのか、という疑問である。時空を越えて「夫」という存在は、つまり「夫の立場」で女友達を支配していたのかもしれない。この時から、ようやく女主人公は自分の軽率さに気が付き始める。

“I called myself a fool for not

having been quiet till we were man and wife ” (*The Friends of The Friends*: p.159.)

しかし、「約束」は継続したままだった。女友達は、未亡人の衣装を身に纏ったまま、「約束」を守るために「婚約者」に会うために出かけていったのだ。しかし、女主人公の激しい嫉妬のため、意図的に、「約束の時間」をずらされ、この時は、女主人公の婚約者と会うことは出来なかったのだ。

「私はお会いしたかったのに、彼は嫌だったみたいね。」という、この女友達の「一言」は、彼女自身の優しさだったのだろうか。

“ If I am, he won't be!”<sup>21</sup>

女友達は別居中の「夫」の死をしらされた、無頓着な女主人公は、自らの軽率な行為がとんでもない事件の幕が開く事に気付いてはいなかった。彼女には「疑惑」という事だけが取りついていたのだ。

だが、仰天するようなことが生じたのだ。喪服のまま、その夜遅く、「約束」を守るため、女友達は婚約者と会っていたのだ。時空を越えて「以前から、二人は密かに合っているのではないか」という疑惑に苛まれた結果、物語りの終結部分で、收拾のつかないほど狂乱してしまった女主人公が、婚約者の取り成しにもかかわらず、正気を失い、“ Another person has come between us . ” (*The Friends of The Friends* p.171.)と、思わず叫んでしまったこの言葉であるが、実際の意味は、一体何を示しているのだろうか？

女友達の言葉（注21）は、凍るような恐怖を表していたのだ。この言葉の“ he ”は無意識のうちに「夫の意志」を代弁していたのかも知れない。

又物語の最後に女主人公が述べているように、女友達の夫による無言の「意志」を示しているのかも知れない。“ his inconceivable communion ”として、女友達の死とは、その夫が妻に「意志」を伝えた事を証明するとすれば、「恐怖」は最高潮に達してしまう。

### 3) doubling

女主人公は、自らのお節介が原因となり、無垢な想像力が「疑い」へ、やがて「嫉妬である」事によっていったことに気付く。

だが、この「嫉妬」は厄介なものとなるのだ。文字通りの“ the dread of jealousy ”

H.ジェイムスは言葉や心理の「同時性」の効果をうまく用いて、ポウとは対照的に壮烈な“ terror of soul ” 心理的に現していく。H.ジェイムスの作り出した ghostly tale の「畏」はこのあたりから始まるのだ。実は、女友達は「死んだ夫」の領域にあった事を読者は気付き始めるだろう。更なるストーリーの展開はまさに驚嘆するような「恐怖」である。

女主人公は彼女の「死」を知らされて驚愕する。その偶然性は余りにも接近しているが、H.ジェイムスは「周知の心臓病」であった事で読者や女主人公を納得させている。このあたりの言い訳はポウの作品にも見られるように、「事実（現実性）」を証明するための「技巧的」である。

a long - latent weakness of the heart, determined probably years before by the agitations and terrors to which her marriage had introduce her. She had in those days cruel scenes with her husband, she had been in fear of her life...<sup>22</sup>

どうやら、彼女はこの事実をすでに認識しており周囲が「疑惑」や「同情」をする中で、穏やかな生活を維持する事に専念していたのだ。しかし「心臓」に欠陥を持っていた彼女に過度の心労が重なっていた。夜の11時ごろ彼女の事を心配する従兄弟達とホールで出会った後家へ戻る。居間でワインを飲んでいたが「殆ど聞き取れない、小さな呻き声」をあげるとそのままソファに倒れ込むと亡くなってしまったという。しかしながら、想像力豊かな女主人公は「ある種の疑惑」に取付かれる「一体彼女は従兄弟達に出会うまで「何処にいたのだろうか。」納得出来る「疑惑」である。



ところが以外にも「婚約者の家」を訪問していたのである。「彼女は死んだ」と伝えるが「生きている彼女と会った。君が今いるその場所で」と言い切る婚約者に女友達の「振る舞い」を執拗に問いただす。彼の答えは明快である。“She’s gone. she’s lost to us for ever; so what does it matter now?” (*The Friends of The Friends* p.169.)

女主人公には合点がいかなかった。しかも「想像力と疑惑」は募るばかりであり、“Another person has come between us”という、結論が彼女の脳裏から離れないのだ。「同じ体験を持つ二人にプライベートな時間」が存在した事を確信するばかりである。次第に、二人の“accessibility to forms of life” “idiosyncrasy” “peculiar power”を信じて疑わない彼女は「混乱状態」に陥っていった。

女友達は彼女との「約束」を守り、友達の婚約者に会いに行くという、実に「単純な」ストーリーの展開をなしていたが、女主人公の「想像力」と「お節介」が「ありえない結果」を作り出したものだ。

H.ジェイムスは鋭い「感性」をもって、人間の心の奥に潜む「敵意＝嫉妬＝悪なるもの」という偶然性を提示させながら気味の悪さを見事に引きずりだす事に成功させている。

女友達の「夫の死」。そして「重い心臓病」という困難な状態にもかかわらず、女友達は彼女の「婚約者」を尋ねて行った。そしてそれから間一髪之差で彼女は「心臓麻痺」を起こして死んでしまう、という、その「偶然性」が引き金となった悲劇だ。

婚約者と会った時、彼女は果たして「生きていた」のだろうか、「死んでしまった亡霊」であったのだろうか、という疑問。そして、女主人公の魂に、残された“the dread of jealousy”。

「婚約者」の沈黙と女主人公の魂の絶叫による饒舌の「結末」は不気味な余韻となって「読者」を混乱させ「喜劇」さえ誘発させている。しかも、この物語の「副題」を意味している“birds of a feather”は“an unquenchable desire”を次第に要求してくるという含みをもっている。次第に高まる魂の恐怖は、*The Friends of The Friends* と *William Wilson* に共通しているのは“uncanny”だろう。“birds of a feather”には「二重性」というものが見え隠れして

いる。一般的には“doubling”という言葉が用いられるが、この場合、それぞれ女友達と夫、女友達と婚約者の相互間の不気味な“communion”が“doubling”を意味している。そこには「何か不思議な力」が存在しているのだ。(心理学者フロイトの考えも同じ様なものが見られる。<sup>23)</sup>

Wilson が覚悟を決めてもう一人の Wilson と対決した時、倒れた彼の姿をみて愕然とする場面を思い出せばより明確になってくる。

A large mirror, so at the first it seemed to me in my confusion - now stood where none had been perceptible before;...Not a thread in all his raiment not a line in all the marked and singular lineaments of his face which was not, even in the most absolute identity, *mine own!*<sup>24</sup>

ポウは「鏡」という媒体を用いて、言葉の二重性と心理から生じる二重性を巧みに操っている。これらの物語全体に漂っている“uncanny”をさらに高める効果として「鏡」という言葉を選んだのだ。Wilson の心に芽生えた、抑えられないもの“irresistibly”は同時に“uncanny”現象が原因している。そして、もう一人の Wilson を殺すという行為が抑えられなくなったのだ<sup>25</sup>。この衝動的な欲望は、エゴである。「鏡」を見たことによる自己意識の確認、そして「衣服」が自己を認識するための証明であるように、Wilson は死のために横たわった彼を見たとき、はっきりと「自己」というものを明確に確認できたのだが、その時はすべてが遅れたのだ。彼自身も消滅したとされている。だが、果してそれだけだろうか?<sup>26</sup>

*William Wilson* において、もう一つの共通性として、“an unquenchable desire”を求めるとすれば、Wilson にも Ligeia と同様に生命への欲望があったかも知れない。

“a desire for life”は“aesthetician”であるポウ自身のもう一つの究極のテーマでもあり、“doubling”の大きな要素となっているからだ。

“doubling”は「目覚めの時＝意識」と「眠りの時＝無意識」における魂の恍惚とした状態にみる幻想であり、ほんの一瞬においてのみ生じる“phenomena”であるとされている<sup>27</sup>。

Have I not indeed been living in a dream? And am I not dying a victim to the horror and the mystery of the wildest of all sublunary visions?<sup>28</sup>

冒頭で Wilson が告白しているように物語の「曖昧さ」が重要性を表している。これらの物語をパウは“tale”と呼んでいるように、殺人という事実も「曖昧＝夢の中＝無意識」での出来事なのかもしれない。これらの条件が整えば、“doubling”が可能である。又、恍惚とした状態に陥る事が可能となり「美」を垣間見ることができるのだ。

*The Friends of The Friends* の悲慘な結末であり、彼女に終始、取り付いていた恐怖は“Another person has come between us” あった事が判明する。

パウの得意とした“doubling”と比較すれば、まるで身の毛が与奪ような恐怖である。

*The Friends of The Friends* において、女主人公が指摘しているような、婚約者とすでに死んでしまった女友達との密会が“accessibility to forms of life”という超絶的な力をもった「甦り」であるとすれば、心理的な圧迫感を伴った、“doubling”である。そして同時に“an unquenchable desire”という「復讐」を含有させている。

H. ジェイムスは、この物語において、読者の「納得」を勝ち得るために問題の解決を“it was a response to an irresistible call”という、皮肉な答の中に導き出している。

“the mark of his own hidden hand”を女主人公の「魂」の奥深い部分に刻み込むという、生き地獄の印をもって、女主人公の一生を支配することで証明されている。

そして、善の Wilson が断末魔の叫びを挙げながら息絶えるとき叫んだ言葉を思い出せば、より明確になってくるかもしれない。

*“You have conquered, and I yield. Yet, henceforward art thou also dead dead to the world, to Heaven and to Hope! In me didst thou exist and, in my death, see by this image, which is thine own, how utterly thou murdered thyself.”*<sup>29</sup>

Wilson が残した言葉は間違いなく“the mark of his own hidden hand”である。相手がもう一人の相手を「支配する」という“doubling”が現実性を帯びているものこそが、H. ジェイムスの世界かもしれない。

結局、女主人公は二人の大切な友人を失ってしまった。ジェイムスはこの当たりの心理の恐ろしさを表現するのを得意としているのである。

#### < Texts >

Henry James: *Ghost Stories of Henry James* ed by Martin Scofield (Kent, England: Wordsworth Classics Editions Limited, 2001)

本論文中の引用は全て、この Text のページを示す。  
(区別するため、Henry と記す。)

Edgar Allan Poe: *The Fall of the House of Usher and Other Writings* ed by David Galloway (London: Penguin Books, 1967.)

本論文中の引用は全て、この Text のページを示す。  
(区別するため、Poe と記す。)

#### < 参考文献 >

Henry James: *The Turn of the Screw* ed by Deborah Esch and Jonathan Warren (N.Y.: A Norton Critical Edition, 1999.)

Sigmund Freud: *The Uncanny* translated by David McLintock with Introduction by Hugh Haughton (London: Penguin Books, 2003)

William James: *Psychology The Briefer Course* (N.Y.: Dover Publication INC. 2001.)

ぼー著『黒猫・黄金虫』刈田元司訳（東京：旺文社文庫、昭和 49 年）

（注）

<sup>1</sup> p.157. (Henry)

<sup>2</sup> H. ジェイムスの著: *The Portrait of a Lady*: 第 5 章で主人公のイサベルが従兄ラルフが“ghost”について語り合っており、大変興味深い。幽霊を見た経験があるラルフに、イサベルが「幽霊を見る方法」を尋ねる。ラルフが悲しげに首を振りながら答える。  
“I might show it to you, but you never see it. The privilege isn't given to every one; it's not enviable. It has never been seen by a young, happy, innocent person like you. You must have suffered first, have suffered greatly, have gained some miserable knowledge. In that way your eyes are opened to it...” Henry James: *The Portrait of a Lady* (London: Penguin Books, 1984, p.101.) 同物語後半で、イサベルは人性の「苦悩」を体験したが、従兄のラルフを失い、初めてその愛の深さ等に気付き「幽霊」を見ることが出来た。(p.622.) お互いの影響しあう計り知れない力が「幽霊をみる」という現象を引き起こすのだろう。

<sup>3</sup> H. James; *Some Short Stories* (Virginia, Indy Publish com.) に集約された *Brooksmith* (p.11.) からの引用。

<sup>4</sup> p.164. (Henry)

<sup>5</sup> p.168. (Henry)

<sup>6</sup> ジェイムスは“Imagine a door”という考え方を強く抱いているようだ。「ドアの向こうに何かがある。長い間空き室になっていた部屋には「亡霊がすんでいる。ドアを叩く音は「怪奇」である。」

<sup>7</sup> p.314 (Henry)

<sup>8</sup> p.314 (Henry)

<sup>9</sup> p.315 (Henry)

<sup>10</sup> p.330 (Henry)

<sup>11</sup> p.179 (Poe)

<sup>12</sup> H. ジェイムスは“second self”の問題を取り扱った「物語」を数多く書いている。*The Private Life* 等。

<sup>13</sup> p.156. (Henry)

<sup>14</sup> p.175 (Poe)

<sup>15</sup> p.176. (Poe)

<sup>16</sup> ポログレシブ英和中辞典(小学館)参考

<sup>17</sup> ぼー著『黒猫・黄金虫』刈田元司訳（東京：旺文社文庫、昭和 49 年）p.204.

<sup>18</sup> H. ジェイムスの作品に共通するものは、お節介な登場人物が必ず現れ、物語をややこしく発展させていく。

『ネジの回転』等はその典型的な例だろう。新任女家庭教師は、着任早々、「ブライ家」の古くからの使用人グロス夫人を何時の間にか、彼女の「空想と現実の怪奇な物語」の中へ巻き込んでいくのだ。

<sup>19</sup> p.152. (Henry)

<sup>20</sup> p.159. (Henry)

<sup>21</sup> p.161. (Henry)

<sup>22</sup> p.163. (Henry)

<sup>23</sup> Sigmund Freud : *The Uncanny*

<sup>24</sup> 178 (Poe)

<sup>25</sup> H. ジェイムスの兄である W. ジェイムス (1842-1910) は、哲学者、心理学者として有名であるが、彼の著 *Psychology: The Briefer Course* (N.Y. Dover Publications, INC, 2001) 中の Chapter3 “The Self” の章 (p.43 - p.83.) The Me と The I について詳しく述べており、又興味深い点として、alternating selves (doubling) 等については実際の研究報告として実例をあげている。“One patient has another self that repeats all thoughts for him. Others, amongst whom are some of the first

---

characters in history, have internal  
 demons who speak with them and are replied to  
 ...Occasionally, parts of the body lose their  
 connection for consciousness with the rest, and  
 are treated as belonging to another person and  
 moved by a hostile will. Thus the right hand may  
 fight with the left as with an enemy. " (p.75.)  
 しかしながら、作家はこのような事柄を考えに加えて  
 ではないだろう。

<sup>26</sup> Sigmund Freud は彼の著 *The Uncanny* において、  
 人間心理を様々な角度から患者の霊を挙げながら、  
 著述している。

<sup>27</sup> Poe はこの現象を幾度も繰り返して証明しようと  
 試みている。

"...They arise in the soul (alas, how rarely! )  
 only at its epochs of most intense tranquility -  
 when the bodily and mental health are in  
 perfection - and at those mere of points of time  
 where the confines of the waking world blend with  
 those of the world of dream... " (Between  
 Wakefulness and Sleep; Morginalia)

<sup>28</sup> p.159(Poe)

<sup>29</sup> p.178(Poe)この件にかんしてフロイトの著、*The  
 Uncanny* におけるThe Uncanny 章 (p.123 p.159 )  
 にて作家達の doubling についても取り上げている。

" This work explores the connections that link the  
 double with mirror - images, shadows, guardian  
 spirits, the doctrine of the soul and the fear of  
 death. It also throws a good deal of light on the  
 surprising evolution of the motif itself. The  
 double was originally an insurance against the  
 extinction of the self or... " an energetic denial  
 of the power of death " , and it seems likely that  
 the " immortal " soul was the first double of the  
 body. The invention of such doubling as defense  
 against annihilation has a counterpart in the  
 language of dreams, which is found of expressing  
 the idea of castration by duplication or  
 multiplying the genital symbol. " (p.141.)

作家の考え方はThe Doppelganger=doubling という  
 ものを考慮したものであり、「自己分析」を求める過  
 程で、「気味の悪さ」をより効果的にあげるためであ  
 って、「分析」とはかけはなれるべきであろう。